

□モデレーター

■筑波大学

体育専門学群 学群長 真田 久
 (スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会 実行委員)

□登壇者

■公益財団法人日本サッカー協会 日本サッカーミュージアム

コミュニケーション部 参事 小野沢 洋

■公益財団法人講道館

図書資料部 部長 村田 直樹

■国立科学博物館

事業推進部 参与 小川 義和

■中京大学

スポーツ科学部 教授 来田 享子
 (スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会 実行委員)

真田：それでは、これからシンポジウムを始めたいと思います。最初に4人の方々に10分ほど発表していただき、その後ディスカッションという形に持っていきたいと思います。

では、最初にサッカーミュージアムの小野沢様からご発表をお願いいたします。

小野沢：日本サッカー協会、小野沢でございます。よろしくお願いいたします。座ったままで、発表させていただきます。

私ども日本サッカーミュージアムは、ご存じのように日本サッカー協会、単独の競技団体が運営しております。日本サッカーミュージアムの概要につきまして、お話しさせていただきます(図37)。

日本サッカーミュージアムは、日本サッカー協会が1996年に出したアクションプランの中で、サッカー関連の事務局を1カ所に集めたいということ、その中に博物館、アーカイブ機能を持ち合わせたものを持ちたいという意向がありました。2002年のワールドカップが成功し、ある程度、資金的な余裕ができたこと、2002年の日本のワールドカップ組織委員会が記念館をつくりたいという構想を持っていたこと、これらが合致し2003年の秋に文京区本郷にJFAハウスを開設、そして12月にミュージアムをオープンいたしました。これまでに約55万人の方にご来館いただいています。

日本サッカーミュージアムは、JFAハウスの中の1階、地下1階、地下2階を利用しています(図38)。

日本サッカーミュージアムの歩み

| | |
|----------|--|
| 1996年 | JFAアクションプラン→JFAハウス/博物館 |
| 2002年12月 | JFAハウスの竣工 |
| | JAWOC (2002年FIFAワールドカップ日本人応援団) 記念館開館式典 |
| 2003年1月 | JFAミュージアム検討委員会/JAWOCとの協議 |
| 9月 | JFA、JAWOC、Jリーグ移転、JFAハウスとして稼働 |
| 12月 | ミュージアム完成協議会/グランド・オープン JAWOC解散 |
| | *JAWOC解散時に記念事業費(ミュージアム運営費)とともにJFAに譲渡 運営はJFA専攻局ミュージアム部が担当 |
| 2012年4月 | 記念事業費特別会計を終了 JFA一般会計に組み込み |
| 2013年4月 | ミュージアム部がコミュニケーション部に編入される |

図 37

日本サッカーミュージアム館内



図 38

主となる展示場は地下2階です。ここだけが有料で、各ゾーンを動線に沿って観覧いただくようになっています。2006年に日本サッカー史を中心とした展示に改装しています。地下1階には日本サッカー殿堂があり、現在、72名の方を掲額しています。1階のヴァーチャルスタジアムでは、これまで大型映像装置メガビジョンによるプログラム上映を行っていましたが、2014年末に終了しました。現在はミュージアムの企画展関連のトークイベントや映画上映会、それから日本サッカー協会、Jリーグを始めとするJFAハウスに入居する団体の記者会見、イベントなどで利用しています。

サッカーミュージアムの事業ですが、表彰、展示、記録・収集、コミュニケーションの4つの要素で構成・運用されています(図39)。

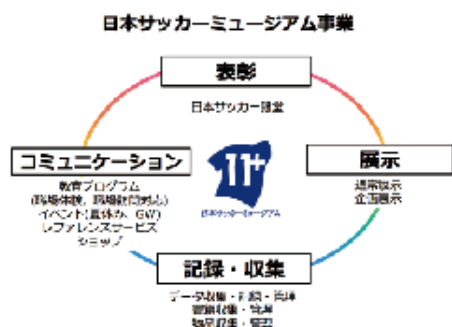


図 39

今日はこの中でコミュニケーションの中にあるレファレンスサービス、それから記録・収集の一部についてお話しさせていただきたいと思います。

レファレンスサービスですが(図40)、当館のレファレンスルームは地下1階にございます。利用方法は事前予約制をとっており、利用者の方に

日本サッカーミュージアム レファレンスルーム



約26,500件
サッカー関連図書
各種大会記録資料 等
事前申し込み制
利用料金 高校生以上 600円
小学生 300円
開室日
火曜日～金曜日 13:00～18:00
土曜日 10:00～18:00
休室日、祝日の利用はミュージアム休館日に依り変更
電話

図 40

展示観覧と同額の利用料金をいただいています。

資料検索システムを備えており、昨年末にリニューアルいたしました(図41)。

レファレンスルーム利用

資料検索システム

<http://210.237.98.102/jfm/index.html>

外部サイトにて運用

パソコン利用した資料検索

資料の複写(有料)等



図 41

検索システムは日本サッカー協会の「JFA.jp」の中の日本サッカーミュージアム・ホームページからも利用できます。キーワードでの検索が可能となっていますので、当館の資料はこれで分かると思います。もちろんレファレンスルームに来ていただいて資料検索することも可能です。また、有料になりますが、資料の複写も行っております。

レファレンスルームの利用目的ですが、やはり調査・研究を目的として来室される方が75%以上、約8割を占めています(図42)。

レファレンスルーム利用目的

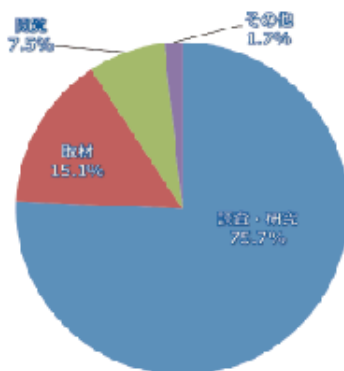


図 42

大学生、大学院生、それから高校生もそうですが、論文作成などに使われているようです。このほか書籍、雑誌、新聞記事などの執筆のための調査や、テレビ番組のリサーチなどに利用されています。

主な収蔵物ですが、単一の競技団体ということもあり、日本サッカー協会の発行物や、国内外の各種サッカー大会の関連資料、大学・高校チーム・クラブの年史などがございます（図 43）。この辺は通常、書店や図書館などで目に触れないものもありますので、これらは結構貴重なものだと思います。

主な収蔵物

JFA関連
 発行物、年表誌、日本代表年報、
 記録、年鑑、資料写真集等

Jリーグ・Jクラブ関連
 広報誌、イヤーズブック、サイトブック

各種大会関連
 海外の大会プログラム
 年鑑等、アジアサッカーレポート

**FIFA・大陸連盟
 各協会関連**
 年鑑誌、年表誌、FIFA発行の歴史年鑑、
 発行、年鑑

関係等、アジアサッカーレポート

**地域・都道府県協会
 学校関連**
 年表誌、年鑑、大学・高校サッカー年史



JFA年報誌「歴史」

図 43

最後に、資料の一部でサッカーの公式記録の用紙をご紹介します（図 44）。左側は 1936 年のベルリン・オリンピック、日本がスウェーデンを破ったときの記録用紙です。右側は 1967 年に日本蹴球協会と言われていた当時、初めて制定された公式記録用紙です。日本ではこの頃から統一した詳細な公式記録用紙を試合終了後に報道の方々に配布し、マスコミサービスを行っていました。ただ、海外ではあまりこういうことをしません。メディア各社が独自に統計をとって出すのが普通で、FIFA のワールドカップでも報道陣に対して詳細な記録を出し始めたのは 1990 年頃からですので、日本はそういう面では先端を走っていたと思います。

1936ベルリンオリンピック

JFA公式記録用紙 1967~1979

図 44

次に、左側は 1980 年代に日本サッカー協会に改訂して出した公式記録用紙です（図 45）。右側

は「AFC1997年11月 ジョホール・バル」と書いてありますが、初めて日本がワールドカップに出たときの日本代表チームとイラン代表チームの公式記録で、アジアサッカー連盟が出したものです。国内では 1990 年代からデジタル化が進んでおりますのできちんと蓄積されていますが、それまでは手書きのアナログの公式記録用紙ですので、これをきちんとデータ化していかなければいけない。それから左側の用紙ですが、ジアゾ式複写いわゆる青焼き用の紙です。個人的にはこのような原紙をきちんと資料として保存することも大切ではないかと思っております。

JFA公式記録用紙 1990~1990年

AFC 1997年11月 ジョホール・バル

図 45

簡単ではございますが、日本サッカーミュージアムからのお話は、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

真田：続きまして、講道館の村田様お願いいたします。

村田：ただいまご紹介いただきました講道館の村田と申します。10 分間お話をさせていただきます。柔道なるものは明治 15 年（1882 年）5 月に始まったと言われておりますから、130 年の歴史を持った我が国発祥の柔術から柔道という体育活動に変えた運動文化ということが言えます。そして今から約 30 年前、講道館を主体として 100 周年記念事業という活動が起き、全国の柔道修業者を対象に、講道館の拠点における改修、新しい柔道場や宿泊施設など大改修を行いました。100 周年記念事業の折に建てた新しいビルの 2 階に、初めて講道館流の資料館及び図書館

を合わせた図書資料部という新しい部局が誕生した訳です。

新館の2階が資料館。広さはちょうどこの会場ぐらいでしょうか。図書館は閉架式で、リストで調べていただき、司書のほうにそれをお願いすると奥からその文献を持ってくる、こういう形式でございます。

資料館、図書館ともに、基本的には創始者である嘉納治五郎先生の所有物を基本とし、そのほかは全国の指導者の皆様方、古い道場、世界からのお客様等々が資料、図書、文献等をご寄贈くださり、それを集めておるということになります。

資料館のほうからご説明申し上げますと、資料館はこの会場くらいの大きさの部屋を、一般展示室、殿堂、師範室の3つの部屋に分けております。

一般展示室はいわゆる柔道の創始から東京五輪で正式種目として入るまでの歴史が展示物、写真、新聞の記録等々で展示されています。3つの部屋の中で一番大きく、この会場の半分ぐらいでございます。展示室を入口から入ってゆっくりご覧になっていただだけでも、専門家ではない普通の人であっても大体30分から40分ぐらい掛かる非常に内容の濃いものが展示されていると思います。専門家が来られると、3、40分どころか、長い人は半日かけて見ておられます。と申しますのは、先ほどもあったかと思いますが、時期になりますと先生と学生さんが卒論、修論、博士論文等々、論文を書くための資料収集に来られます。泊まりがけで来る人もおり、非常に貴重な資料があると自負しております。

殿堂という次の部屋に参りますと、これは殿堂規定がある訳ですが、今まで柔道の普及、発展、指導等に特に功労があった方、並びに十段というところまで到達された方、この方々が顕彰されております。ここはそれほど広い部屋ではございません。

それからその奥、ここもそれほど広い部屋ではございませんが、師範室と称して、創始者である

嘉納治五郎に特化した展示物が置いてございます。内外の方々が師範室に入って最初に目を引くものがございます。嘉納治五郎という方は10代の頃より柔術を修行した訳ですが、その時に着られた稽古着です。柔道が始まる前ですから、130年以上前の本物そのものを飾ってございます。私は管理する立場の者ですが、毎日、その稽古着の前に接するたびに息を飲むような思いに毎回なります。その他、嘉納師範という方はご承知のように教育者でおられた訳ですが、教育に関わるご本人の書かれた揮毫(きごう)、筆で書いたものがございます。師範室の最後のコーナーでは、我が国最初のIOC委員ということでの活動、そのようなものを複製ではなく、全部、本物そのものが並んでいます。ただし、専門家の方々から私がいつも言われるのは「村田さん、早くレプリカ・コピー化して、本物は収蔵庫の中にしまっちゃいなさいよ」、「『源氏物語』でも、いつも本物を出している訳じゃありませんよ」というふうに指導を受けております。

海外の方々も年間を通じて道場の稽古にはたくさん来られますが、海外の方々で資料館を訪れるような方は学術的に非常に高度な研究者が多く、私どもも非常に喜んでおります。

図書館のほうはコピー等は有料で行っております。ただし時代の古いものは残念ながらコピーを許可しておりません。非常に貴重なものであり、損傷する恐れがあることが、今、大きな課題になっております。

資料館・図書館の活動では、嘉納先生がおられた昭和9年頃から医事研究会という名で発達し、医療に関わることのみならず広く人文社会を行おうということで、講道館柔道科学研究会という名で昭和20年代後半より2年に1回ずつの研究紀要の発刊、並びにその間の年は研究集会で学術関係者、体育・柔道関係者に助言を行い、学術活動を行っているところが、講道館の図書館・資料館の概要です。

甚だ簡単で短い時間ではございましたが、以上で講道館柔道資料館の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

真田：ありがとうございました。続きまして国立科学博物館の小川先生、お願いします。

小川：国立科学博物館の小川と申します。どうぞよろしくお願いします。

今日は科学博物館の話はせず、この秩父宮記念スポーツ博物館にどんな役割を期待するかということで、まとめさせていただきます。

博物館の資源をオープン化して活用していくことによって、文化創造ができるのではないかと考えています。これはいわゆる「地産地消」をもじって「知産知承」と言っているのですが、こういうことを目指すべきではないか、と思っています。

2060年の日本は8,000万人に人口が落ちてしまう可能性がある(図46)。そのときに日本ってどうしたらいいのかなど。これを1億に保つという政策も動いておりますが、場合によっては9,000万人ぐらいになるかもしれない。そのときに博物館として文化を大事にしていく国にしていかなければいけない。

2060年の日本



図 46

出典：内閣府「2013年国勢調査結果」
http://www.souj.go.jp/keizosokuhou/keizosokuhou_13_01_01.html

文化こそがこれからの日本を高める、存在意義を高めるものではないかと思っています。その担い手である文化というのは、当然、スポーツも入りますし、サイエンスも入ることになります。そういう点では博物館にとってすごく重要なことです。しかも博物館は非常に身近にある。一般の方が博物館に来て文化に触れることができる。そこが非常に大きな博物館の役割じゃないかと思っ

ています。

私どもの博物館には有名な「ハチ」の剥製標本があるのですが(図47)、ハチの剥製標本は、私どもの博物館は日本人が育ててきた秋田犬のペットとして展示をしています。しかし、多くの方は大体、忠犬ハチ公としてご覧になって、ここにいるのかと。我々のほうには「忠犬ハチ公と書かないでハチと書いている」とお叱りをいただいたり、「忠犬ハチ公と書け」というようなクレームもごぞいます。つまり、博物館側はこういうふうに展示しているけれども、ほかの方は違う文化価値を持っている。ここが非常に大事なことでありまして、利用者側から見た場合には、いろんな価値を持っているということです。

ひろがる、つながる、博物館資料の文化的価値

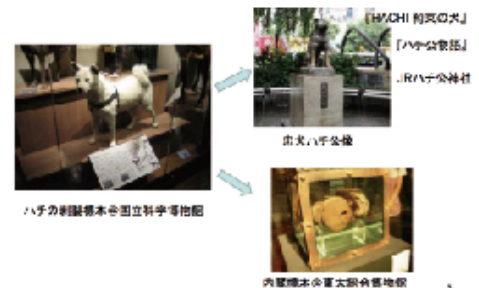


図 47

ハチの剥製標本 国立科学博物館

内閣府 国土交通省 国土院

しかも内臓標本は東大にありまして、東大の博物館にはハチが最期は非常に苦しんだ様子が分かるような寄生虫が沢山入っている内臓標本がごぞいます。そういう学術的な価値と、社会的な話題のある価値と、それから文化的価値と、幾つかの価値が入り混じっているのが現状ではないか。これをつないでいくということが、すごく重要なことではないかと思っています。

これ(図48)は、サイエンスミュージアムネットということで科学博物館が中心にやっておりますが、科学博物館だけではなく、全国の七十数館の博物館が同じデータベースに登録し、博物館の標本データを作っています。



図 48

これをいくつか並べてみると、いろんなことが分かってきます。どういう所にどういう植物が分布しているかということが、うちの博物館だけではなく、いろんな博物館がコレクションネットワークを作ることによって明確になってくる。

要するに、集まる力といいますか、共有する文化というのがすごく重要なことで、それを世界的に集めているのが GBIF Portal というオランダにある機関なのですが、こういうところで行いますと、世界的にどのような分布領域が分かってくるということです。このためには少しデータのためのメタデータといいますか、形式を踏んで、その形式の中に入れていくという、少し面倒な作業がありますが、そこにご協力いただいて、学芸員の方に非常に手間の掛かることをやっていただいています。それは何のためにかというところが、すごく重要なことではないかと思っています。

| 科学系博物館における「科学リテラシー涵養活動」の体系 | | | | | |
|----------------------------|---------|----------|---------|---------|---------|
| 世代・ライフステージ | 幼小(低学年) | 小(高学年)・小 | 中高・高専教育 | 子育て・仕守期 | 高齢者・高齢期 |
| 学習目標 | | | | | |
| 感じる | | | | | |
| 知る | | | | | |
| 考える | | | | | |
| 行動する | | | | | |

図 49

ちょっと難しい図ですが(図49)、私が今、科研費でやっているプログラムです。生涯教育、幼

児から高齢者までのプログラム、学習用のプログラムを各博物館でプログラムを開発するときにマトリックスに考えてみて、どういう目的で博物館で学習プログラム・イベントを起こすかというものです。これを1つの目的にしてデータベースを作っています。先ほどの標本データと違って学習プログラムのデータですから、作った人の著作権もあり、いろいろな課題はありますが、その中に入れてみて、これをみんなで共有しようと。共有することによって学芸員同士がいろいろ勉強になりますし、一般の方がこれを見て「自分はこれをやってみよう」という選択ができるということです。

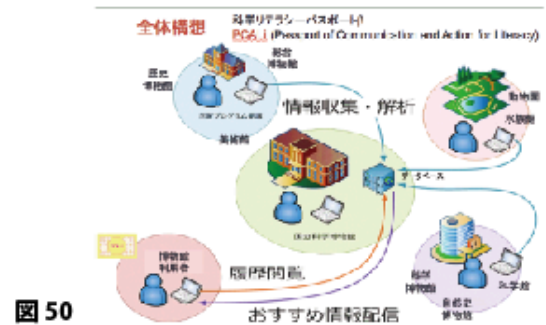


図 50

例えば博物館の利用者がカードを持って実際にどこかの博物館に行くと参加履歴が残ります(図50)。それを通して、うちの博物館や他の博物館の学芸員が「この人はこういう利用をしているのだ」と。そういうことが分かると、先ほどの真田先生のお話のように、利用者の側から見たサイエンスのあり方とか、利用の仕方が分かってくるということです。そういうところを通して、我々の知らないところの利用価値というのが見えてくるのかなど。

我々のほうでは博物館同士の連携はするのですが、利用者側から見た博物館の連携、利用連携といいますか、そういうものが見えてくるのではないかと思います。普通、我々が連携しない美術館なども一緒に入って実際にやっているところですが、いろんな利用の仕方が見えてきているように思います。

これは科学リテラシーパスポートという少し難しい名前ですが、最近、Passport of Communication

and Action for Literacy (PCALi) という名前をつけまして、学生などにも沢山入っていただいて、なかなか面白い結果が出てくるのではないかと思います。南のほうでは九州の水族館、北のほうは旭山動物園等も入っていただいて、皆さんでこういうプログラムを組んでいるところです。

これ(図51)は、もう3段階目ですが「教員のための博物館の日」というのをやっています。



図 51

平成20年度から始めていますが、学校の先生のための博物館の日といって、学校の先生が博物館に来たら無料で入れますよということをやっています。これは科学博物館で始めたのですが、今年は20カ所、去年は18地域で92機関の博物館・研究機関に参加していただいています。1,600人ぐらいの教員が参加していますが、「教員のための博物館の日」は、学校の先生が博物館に来て1日楽しんでもらえばいいと。なかなかサービスはできませんが、うちの場合、無料入館とミュージアムショップの1割引、それからPDAの解説書は300円しますが、それを例えば無料とか、そういうことをして普段来ない先生に来ていただくということをやっております。この趣旨に賛同した博物館に参加していただくということで、私どもはお金を渡していませんし、特に何も支援をしておりますが、コンサルティングといいますが、こうやっていいですよというようなお願いをしているところがございます。

それぞれやり方が色々あり(図52)、これだけ多様に広がっているということは、多分、科学博物館のやり方を真似しなかったというのが上手くいったのかもしれない。

「教員のための博物館の日」各地の状況を按ずる大規模・運営形態(26年度)

| 主催館名 | 開催エリア | 運営形態 |
|------------------|-------|-------|
| 旭川市科学館 | 市 | 持ち回り型 |
| 北見道庁道の村 | 市 | 中心館併設 |
| ぶびのち動物園・帯広動物園 | 市 | 中心館併設 |
| 西小牧市立博物館 | 市 | 単館併設 |
| ムシヅカワールド | 市 | 中心館併設 |
| ミュージアムパーク旭川自然博物館 | 市 | 単館併設 |
| 彦根市立博物館 | 市 | 単館併設 |
| 千葉県立現代産業科学館 | 市 | 単館併設 |
| 武松の博物館 | 市 | 中心館併設 |
| 静岡科学館 | 市 | 中心館併設 |
| 鎌倉市三浦の海洋科学館 | 市 | 中心館併設 |
| 大塚市立総合博物館 | 市 | 中心館併設 |
| 大塚市立博物館 | 市 | 単館併設 |
| 彦根市立二宮自然館 | 市 | 単館併設 |
| 鳥取県立博物館 | 市 | 単館併設 |
| 徳島県立博物館 | 市 | 単館併設 |
| 宮城県総合博物館 | 市 | 持ち回り型 |

単館併設:ひとつの館で行う運営方法。
中心館併設:本館等と併設博物館あり、連携の範囲が拡大・広域化する運営方法。
持ち回り型: 中心館併設のうち、主会場を順番に交替する運営方法。

図 52

旭川市科学館は旭川市博物館、旭山動物園の3つで1年ごとに持ち回りをしています。毎年やるのは大変ですから3館で回しています。蒲田市生命の海科学館も、東三河地区で持ち回りをしていますし、宮崎も幾つかの館で持ち回りをしている。体力の余りないところは持ち回りをするなど、それぞれの館の地域でいろんなことをやっていたら、ということが見えてきました。

結論ですが、私は地域の資源を幾つかの館で共有していくことが、すごく重要なことではないかと思っています(図53)。

知 産 知 承

地域に根ざしたサイエンスコミュニケーション

- ・地域の課題に対し、知恵を出し合い、解決していく
- ・地域にある知恵を掘り起こし、知を創造し、知を共有し、継承し、発信していく活動



図 53

これを「地域に根差したサイエンス・コミュニケーション」ということで、地域の課題を知恵を出して解決していく。地域にある知恵を博物館が掘り起こして、創造して、知を共有して、発信していく活動を「知産知承」と言おうと、自分で勝手に言っておりますが、研究者が集まる科学者のコミュニティー

や一般の人、学校の教育機関や企業、メディアや政府・行政、こういうのが連携しながら地域資源を活用し、課題を共有し、それを解決していく。そういう文化といいますか、共有する文化。自分のところに閉じ込めるのではなく、共有して新しい課題を解決していこうというところが、すごく重要なことではないかと思っています。それが多分、文化の醸成や教育の人材育成というところにも貢献してくるように思います。

このスポーツ博物館が要となって、スポーツを文化として全国に広めていく。もしかしたらスポーツ博物館よりも各地域のそれぞれのスポーツ拠点が広めていくのだらうと思いますが、それを上手くつないで支援していく。例えば資料のデータベースを作るとか、先ほどの教育活動をデータベースにしていくとか、人材を派遣するとか、様々な取り組みはあると思いますが、ぜひそういうことに取り組んでいただきたいと思います。以上でございます。

真田：それでは続きまして、中京大学の来田先生、お願いいたします。

来田：こんにちは、来田でございます。よろしくお願いいたします。

私の場合は今お話をされた3人の方とは違いますが、研究者あるいは教育に使う側、利用者側の立場で話題提供をさせていただこうと思います。

最初のほうに少し紹介をしていただいたのですが、私は二十何年か前に博士論文に取り組んだ時、国内の史料（資料）をずっと探し回って、当然のことながら歴史研究だと秩父宮記念スポーツ博物館・図書館にお世話になるんですね。

研究テーマは「オリンピック・ムーブメントにおける女性の研究」でした（図54）。

オリンピックと女性となると、日本だと人見絹枝さんという最初のメダリスト、あの方のことか

らスタートすることになりますが、彼女を国際的なスポーツ組織に派遣したという意味で、日本女子スポーツ連盟に当たることになります。

秩父宮記念スポーツ博物館との出会い

- ◆オリンピック・ムーブメントにおける女性の研究

人見絹枝と日本女子スポーツ連盟

↓
世界女子オリンピックと
国際女子スポーツ連盟の史料

- ◆史料がない！！
(消滅したとされる組織の史料を
探す困難さ)



図 54

秩父宮記念スポーツ博物館・図書館蔵

その後、実は世界の女子だけのオリンピックというのがありまして、これは意外と知られていませんが、なかなかIOCがオリンピック大会に女性の種目を採用することをしなかった時期に、女性が自分たちだけでオリンピックをやって、自分たちにもスポーツができるのだということを一生懸命表示しながらムーブメントをしていく、そういう時期があるので、この時期のことを調べなければいけない。そうすると、それをやっていた組織って一体何なんだという話になり、それは国際女子スポーツ連盟という名前のところだ、というようにどんどん先に広がって史料を収集することになります。

日本は戦禍に見舞われていて非常に史料収集の状況がよろしくない。東京や大阪はかなり焼けてしまっている。それでは海外に目を投じて外側から攻めようと思った時、史料がなかなか見つからない。何故かという、ある先生にも言われたことがありますが、消滅しただろうと言われていた組織のことを明らかにするのが一番難しい、あるいは組織の消滅を証明することが一番難しい。つまり、史料が一体いつどこから無くなったのか、事故による紛失なのか、存在しないのか、この見極めというのが私たちはなかなかつけられない訳です。

そうした中で、本当に史料が無いということに突き当たりながら、実は足元に大変貴重な史料があったのです。『国際女子スポーツ連盟 陸上競技規則集』が秩父宮記念スポーツ博物館・図書館に所蔵されていると司書さんから教えていただきました。現在も非常に問題だと思えるのは目録が無いことです。外から検索することができないのです。当時、木坂さんという名物司書の方がいらっしゃって、この方がこそっとと出してきてくれたんです。こそっとは出会いがないと絶対出会えない。つまり、研究が進まない訳です、そこでの出会いがないことには。それではなかなか研究が先に進められないと思いつつ、私は幸いにもこれに出会うことができましたので、これが一角になって1つの章を構成することになり、論文を書かせていただくことができた、そういう出会いでした。

そうは言っても、実はあれだけ貴重なものがありながら、私たち研究者が資料としてきちんと活用することができていないものが非常に沢山あると感じています。それは文書史料だけではなく、物に関するものもそうです。

ローザンヌにあるIOCのオリンピック・ミュージアムにある1932年のロサンゼルス大会の時の参加賞（画像なし）と、右側は1930年の時の先ほど申し上げた女子オリンピック大会の参加賞です（図55）。

活用することができていない資料

参加賞（メダル）

象徴されているものの意味を文化や教育や社会状況の差異／共通性の文脈から読み取ること

同時代の「オリンピック」と「女子オリンピック」の参加メダルが分析できることもたくさんあるが、メダルのような資料はあまり活かされていない



図 55

（秩父宮記念スポーツ博物館蔵・文書部提供）

これらはどちらも参加するということによって選手が受け取る、という意味では同じ位置にあるものですが、見ていただきますと、私は今、恐ら

くだと思っているのですが、右側にある1930年の参加賞はスポーツをしている人が女性なんです。オリンピック関係のものには女性のアスリートたちがメダルの上には載ることはなく、みんな賞を与える側、称える側であって、アクティブに動く人物としては置かれていないのです。このような違いというのが、同じ参加ということの中に込められている意味合いですね。こうしたものを私たちは決して分析し切っている訳ではなく、恐らく細かく見ていくと素材が何か、彫り込みが何か、分厚さが何か、あるいは誰がどういう思いで作ったのか、ということまで辿っていくと、その当時の競技大会を作っていたものの全体像というものに、もう少し私たちが近づくということがあるだろうと思います。

つまり、象徴されている物の意味を文化や教育や社会状況の違い、ロサンゼルスと30年の大会はチェコですが、チェコという社会状況の違いによって見るということ、と同時に共通性の文脈の中から読み取る、この両方のことをきちっと文物に対してできているかということ、スポーツはまだまだやれることがあるなど思っています。

それから活用することができていない資料ということで、これはJOCのサイトにあるのですが（図56）、以前に秩父宮記念スポーツ博物館で館長をされていた三上さんがコラムを書かれております。

活用することができていない資料

JOCサイト

コラム第19回「日本体操、屈辱のユニフォーム〜ロサンゼルスで受けた屈辱」

...その大会に出場した貞田不二子選手が身に付けていたユニフォームが、スポーツ博物館に展示されている。選手で俳優の志村新三の体像で「恋の告白」を出していたのである。...

<http://www.joc.or.jp/column/2015/02/02/190002080.html>



選手たちの記憶を身体感覚としてたどること

（秩父宮記念スポーツ博物館蔵・文書部提供）

図 56

そのコラムには「日本体操、屈辱のユニフォーム」というタイトルがついており、その大会に出場した選手が身につけていたユニフォームが秩父宮記念ス

スポーツ博物館内にある。これが薄手で伸縮性のあるメリヤス地の体操着だったので衣擦れの音を出していた。このことが他の国の選手の嘲笑の対象になり何を着ているんだ日本の選手は、そういう音がするような体操着だった、という1つのエピソードとして受け取ることもできますが、スポーツをしていた側からしますと、一体この伸縮性のあるメリヤス地のものを着て体操競技をするというのは、どういう身体感覚なんだろうというふうに思う訳です。

つまり、私たちは当時の物から人間の身体感覚としてそこに迫っていくような、そういうアプローチをスポーツの遺産に対してやっているかという、できてないという気がする訳です。選手たちの記憶を身体感覚として辿ってみるということ、この可能性はスポーツならではの「物」として残されているだろうな、と思っています。

ただやれたらいいな、こうしたら研究が進むな、と思うそういうレベルでチラチラっと考えてみますと、さっき少し紹介がありました3D化ですね(図57)。これは質感あるいは凹凸を出すために、全てデジタル技術が違ってくるらしいのですが、そのデジタル技術は普通の展示では見られない角度から物を見るということを可能にする、これは非常に重要な知見を与えてくれるのではないかと思います。

これからのスポーツミュージアムに期待すること

- ◆3D化
筒筒・凹凸が再現され、一般的な展示では見られない角度からとらえることができる
- ◆文書史料のデジタル・アーカイブ化
人やキーワード(パラダイム)によって時代・地域を横断的に俯瞰する
- ◆人的資源のDBとのリンク
教育的機能の強化
- ◆所蔵資料目録の連携管理化
15年越し・ニースのフランス国立スポーツ博物館へ入手した史料

図 57

それから文書史料のデジタル・アーカイブ化。先ほどサッカーミュージアムで少し紹介がありましたが、人やキーワード、キーワードというより

は、むしろパラダイム、知の認識と言ったほうがいかもしれません。そういうパラダイムみたいなものによって、時代とか地域を横断的に俯瞰する。歴史史料を見に行ったら、1930年代の研究をしている人は30年代のボックスしか見ません。それをやめて60年代の箱とつないでしまう。つないで、そうして見たときに、私たちに何が見えるのか。こういう検討の仕方というのは、やっぱりアーカイブ化によってのみ可能になります。ですから、地域や時代を横断的に俯瞰する目を養ってくれるような、あり方があればいいなど。

最終的には人的資源ですね。教育的機能と結びつけていくのは、さっき少し紹介があったようなこととも関係してくるのではないかと思います。そして、どうしても欲しいのは所蔵資料の目録の連携管理です。私は今年の4月にニースのフランス国立スポーツ博物館に行って、ずっと探していた国際女子競技連盟の議事録をようやく手に入れましたが、「こんなにかかるはずはないだろう」というぐらいのものだった、ということになります。

イメージとしてはこういう図(図58)になりますが、これは先ほど小川先生が紹介されたものでほぼカバーされている非常によく似たコンセプトだと思います。

過去と現在を際す知の拠点(HUB)としてのスポーツミュージアム



図 58

最後、まとめに入りたいと思います(図59)。スポーツというのは、それが醸成された社会を映す鏡であると同時に、人間の身体を通じて社会に影響を与えます。そして変化を促すものでもあります。このようなスポーツの歴史や現在というのは、可能

な限り多角的に捉えた、時空間を超えた全体像として見る。ちょっと抽象的な言い方になりますが、そういうものとして色々な人の目に触れ、そしてその多角的な価値が共有される。そのことによって初めて、社会の未来を展望するためのレガシーになり得るのではないかと思います。そういう意味で、スポーツミュージアムというのはそれを具現化する存在になるだろう、と研究者の立場からは思っております。以上です。

まとめ

- ◆スポーツは、それが醸成された社会を映す鏡であると同時に、人間の身体を通じて社会に影響を与え、娯楽を促すものでもある
- ◆このようなスポーツの歴史や現在は、可能な限り多角的に捉えた「時空間を超えた全体像」として、多様な人々の目に触れ、その多角的な価値が共有されることによって、社会の未来を展望するための「レガシー（遺産）」となり得る

図 59 具現化する存在としてのスポーツ・ミュージアム

真田：4人の先生方、大変に貴重なご発表ありがとうございました。

それでは小川先生には、現在、国立科学博物館でいろんな展示が行われているということで、その特徴を少しご紹介いただけますでしょうか。よろしく願いいたします。

小川：国立科学博物館では、7月14日に一部リニューアルオープンをし、新しい展示をオープンしました。これは映像と実物資料を使った展示室ですが（図60）、一番左側の映像が138億年前からずっと続いている宇宙史、真ん中の映像が地球史で47億年ぐらい前から人類が登場するまで、



図 60

2015年7月14日リニューアルオープン
地球館1階 地球史ナビゲーター

一番右側が人類史（人間史）で人類が登場してから今現在までということで、これをつなげて見る。

最近、人類の存在そのものも地球史の中に入れて1つの歴史として見ていこう、という流れがありますので、『137億年の物語』というのが出ていますが、そういうものも含めて通して見ていくという力は非常に重要なことではないかと思っています。これが映像と実物で語るという展示室です。

次は世代別の対象者を対象にしたプログラムです（図61）。これは幼児、特に4歳から6歳の子供を中心としたプログラムで、親子でコミュニケーションをとりながら行うのですが、実物の標本が入っています。あちらに剥製標本、これはティラノサウルス、大きい恐竜の標本です。その奥にティラノサウルスの子供の標本があるのですが、ティラノサウルスの幼体はまだ見つかっていないということで、研究者がデータを入れて3Dプリンターで作りました。これも世界初だと思います。そういうものを潜りながら下から見る、横から見る、子供ならではの観察の仕方があると思います。



図 61

2015年7月14日リニューアルオープン
地球館3階 親子のたのびひろば コンパス

必ずしもこれは標本を見て何かを学ぶというだけではなく、標本を見て感じてもらうということが、すごく重要なことです。それを子供と親が共有するというのを大事にしており、これを見て家に帰って何を話したか、そこが重要なんです。ここで終わりじゃなくて、次につながるという、そういうところが「親子の身体接触」と「精神的なコミュニケーション」、「共有するという感情の部分」、この3つを家に持って帰って、他の博物館へ行ったり、科学

博物館の他の展示を見てもらおうという、4歳から6歳の非常に狭い領域だけですが実験的なプログラムとして展開しています。非常に人気がありまして、いつもお断りしているような状況で本当に申し訳ないのですが、ある程度人数を絞らせていただき、展示室で運営しているということです。

このほか来館者と常設展の対話を促すということで、二百数名いらっしゃるボランティアの方を半年から1年かけてトレーニングし、展示を見ても科学系のものはなかなか分かり難いという方に対して、こういうところを見たらいいですよというご案内をするということで、つなぐということです。専門家や専門的な物と一般の間をつなぐということがすごく重要なことで、多分、そういうことが博物館の中では非常に重要になってくるように思い、こういう例を出させていただきました。以上でございます。

真田：どうもありがとうございました。

それでは、ディスカッションに入っていきますが、最初に私のほうから、それぞれの方々にご質問をさせていただきたいと思います。

まず、小野沢さんに対してですが、これまで来館者が55万人ですから1年間に直すと大体5万人ぐらいかと思うのですが、この人数がサッカーミュージアムとして十分な数字なのかどうかということなんです。十分であれば何故それだけの人が来たのか、十分でなければこれからどのように考えているか、ということについてお聞きをしたい。同時に、サッカーミュージアムの展示等でのお宝というものはどういうものがあるのか、これをお聞きしたいと思います。

それから、村田先生に対しては、講道館といいますと海外からの見学者も沢山あるかと思うのですが、海外の人から見た場合の資料館の評判はどういうものなのか、あるいはこういう点をもっと改善してもらいたいというような、そのような声

があるのかどうか、そういうことをお聞きしたいと思います。

小川先生には「教員のための博物館の日」を設けて非常に多くの方々が来ているということですが、その効果ですね。教員が来たことで、その後どういふ展開、広がりになっていったのかということがありましたら。これはスポーツミュージアムでも、例えば「コーチのためのミュージアムの日」とか、そういうのを作った場合、それがどうなるのかということ予想する上で非常に面白いなというふうに感じた次第であります。来田先生には選手の記録を身体感覚として捉えていく、選手の目線でスポーツのあり方を実感していく、ということをおっしゃいましたが、具体的にどのようなことが挙げられるのか、少しご紹介いただければと思います。

では、最初に小野沢先生からお願いします。

小野沢：先ほど総来館者が55万人と言いましたが、平均に直すと5万人ですが通常は3万人から4万人ぐらいです。何故多くなっているかということ、なでしこジャパンが2011年の女子ワールドカップで優勝した際のトロフィーが非常に人気がございます、その年だけ突出して多かったということがございます。私どもの展示に来ていただく方というのは応援者、サポーターの方が多く、何か大会があったときに高揚感を煽りたいとか、そういう方の来館が非常に多いため、来館者の推移を見ると日本代表チームの成績と人気によってしまうということが、今、私どもの館の問題点になっております。

それらを打破するため、最近では学術的なところと教育プログラム、中学生、高校生に対する職場体験や職場訪問、簡単なレクチャーをして、内容はサッカーに関わるお仕事のような形でやっていますが、それをミュージアムに合致させて修学旅行や校外学習の中高生を呼ぶというような対策をしています。

しかし、サッカーやスポーツの素晴らしさを知っ

てもらうための日本サッカーミュージアムですから、もう少し広範囲に広げていきたい。特に高年齢の方々に。なでしこのトロフィーの時は非常に年齢層が高かったんです。そういう方々にいろいろ見ていただきたいというのが、今、我々が思っていることです。

真田：ありがとうございました。それでは、村田先生、海外の観覧者からのご意見等ありましたらお願いいたします。

村田：我々の資料館は、とてもサッカーミュージアムさんのように万という単位ではございません。最近5カ年、統計を毎年とっていますが、海外からのお客様は大体、男女合わせて年間2,000弱の推移でご来館いただいております。我々としては、国内、そして世界的な意味において唯一の専門図書館ということであり、来館者数について残念に思っているというようなことはございません。

また、海外からのお客様で講道館にやってこられる方々は、ナショナルチームの方々は別として、ご自分で旅費を出して講道館に来られる方々です。99%の海外の方々は憧れの地に一生に一度は来てみたかったという思いの方々に、もちろん夕方の稽古に参加して指導を受けて喜んでおりますが、昼間は資料館にやってこられる訳です。ヨーロッパに限らず、米国、アジアからもいらっしゃいますが、嘉納先生のお写真を見たり、稽古着を見たり、あるいは思想等々の展示物に触れたりと感激して帰ります。ですから我々としては、非常に喜んで帰っていただけておると今のところは受けとめております。

改良点云々ということになりますと、言葉ですね。日本語表記並びに英語表記で並列して展示物の解説をしております。音声等はございません。そうしますと、必ずしも英語を使う国民の方々ばかりが来る訳ではないんですね。中南米、アジア、

アフリカ、そういう方面から来られる方々のために解説をいかに施せるかという部分は、すぐに取りかかれそうな課題であり、伝達、コミュニケーション、これは非常に重要だと思っておりますので、喫緊の課題と申しましょうか、それを感じております。以上でございます。

真田：ありがとうございました。では小川先生、「教員のための博物館の日」について。

小川：「教員のための博物館の日」というのは、私が文部省の派遣事業でニューヨークの自然史博物館で4カ月ほどインターンとして滞在していた時に「Educator extravaganza（教育者のためのお祭り）」というタイトルでやっていたものをヒントにしました。

ニューヨークの自然史博物館では教員向けにコーヒーを出したり、ジャズバンドが出たりしていました。科博では残念ながらコーヒーは出ませんが、実は旭山動物園でやったときにはコーヒーが出ました。何故かといいますと、旭山動物園と旭川市科学館と旭川市博物館の3者で連携した時に、観光課がバックについて教員を招待し、お金を出してくれたのです。ほとんどの博物館は教育委員会ですが、何故ここに観光課がついていたのかというと、旭川市の課題というのは観光なんですね。旭山動物園は1日で終わってしまうので、宿泊をしないでみんな札幌に帰ってしまう、これが旭川市の課題だと。この課題を博物館側が観光課から渡され、博物館を何とかそういう資源にできないか、ということで行っているところもあります。

そういうことで「教員のための博物館の日」をやることによって、地域の課題というのがそれぞれの地域である程度明確になってきたというのが、1つの大きな、最も大きなアウトカムだと思っています。双方向性の課題は必ず効果がありますので、博物館側としてはネットワークができて、他の博物館の学芸員と仲よくなるということもありますし、学芸員

の教員の理解の日でもあるので、学校の先生はどのような生活をしていて、学校でどんなことを教えているのか、というのを学芸員が理解してくれるという部分。もう一方、学校の先生はそれを知っていることによって博物館の資源が分かりますので、次の年にもう少し教材を変えてみよう。実際、うちの博物館でも若干そういう広がりがございます。明確に数字としてどんな効果があるかと言われると、なかなか数字は出ないのですが、少なくとも参加者は増えています。例えば上野地区で言えば、科学博物館で行っていますが今年は東京国立博物館さん、西洋美術館さん、東京都美術館さん、上野動物園さんも参加していただきました。そうすると、うちの博物館に普段は来ない国語の先生とか、社会の先生とか、体育の先生とかいらっしやまして、理科の先生以外の先生が増えたというのは、非常に大きな効果だというふうに思っています。以上でございます。

真田：ありがとうございます。それでは来田先生に、記憶を身体感覚として捉えていくことについて。

来田：さっきのスライドを出しながらでよろしいですか（図 56）。ここに書いてある「薄手で伸縮性のあるメリヤス地の体操着」って、皆さん感覚的に思い浮かびますか。やっぱり、すごく遠いです。私、30年代の歴史研究をしているのですがとっても遠い世界なんです。しかも長袖です。体操競技をやっている人がいらっしやったら、おそらく非常に動作を制限するものであったろうなど。しかも、薄い伸縮性があるといってもメリヤスですから、おそらく今の化学繊維に比べれば、その伸縮性というのは知れているだろうと。そしてスポーツをしている時にそれが音を出す。服が音を出すという感覚も、私はあまり経験したこと

がないんですね。これらを全部再現してみようとすると、歴史研究の範疇を超えるんです。

体育とかスポーツ科学というのは、ご承知のとおり自然科学系の領域と人文社会科学系の領域で、すごく学際的に成り立っているのですが、あまり一緒に仕事をするのがなく、自然科学のほうはどちらかというと、パフォーマンスを追求するとか、あるいは健康を追求するというふうに行きがちなんです。そうではなく、例えばこういうものを再現した時に、これを着て体操競技をずっとし続けると、どのような体の生理現象が起きるのか、あるいはどのように運動が制限され、どこまでのパフォーマンスができたのか、というようなことは、おそらく今の自然科学の手法を使えば分かってくると思うんです。そういうことを使いながら、一体、選手は何を感じていたのかということ、私たちは1930年という時代を理解するために使っていく、そういう発想なんです。

では何故それが必要なのか、そこまでして30年に戻らなきゃいけないのかということですが、1つは私たちは多分、生涯一度も出会うことのない人のことを考えながら、国際社会のあり方を考えなければいけない時代にいると思うんです。そういう時代において、絶対に出会わない人が何を感じているかということ想像する力が弱くなれば弱くなるほど、身近にいる人たちを傷つけたり、身近にいる人に攻撃を仕掛けたりすることが平気になってしまう。それは日本の中の現象として出てきている訳です。スポーツというのは、そういう誤解を解いてお互いを理解するために存在してきた文化なのに。文化なんだからと言ったほうがいいかもしれません。国際社会の、多分会いもしない、絶対に住まない場所の生活感覚を想像する力をスポーツはおそらく育てられるはずだと思う訳です。その手がかりの1つが過去にあったっていいじゃないかと、そういう発想なんです。そういうやり方で記憶というものを理解していく、身体感覚を理解していく、そういう発想というのがあってもいいんじゃないか。それがスポー

ツ文化の理解の1つのあり方だろうと。

それをやっていった時に、このコラムのタイトルはひょっとしたら変わるかもしれない。これは屈辱だったのかということなんです。そうではなくて、当時の人たちにとっての、これを着た心地良さみたいなのをもっと出るようなコラムのタイトルはあり得るかもしれない。そういう感覚みたいなものを一元化していかないような、豊かな世界を引っ張り出してくるような可能性がここにはあるのではないか、と思うということです。

真田：どうもありがとうございました。それでは次に、もしも登壇された方々同士で何かお互いに質問等ありましたら、お願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

小川：真田先生の先ほどのお話の中に「Sport for All」という言葉がありましたが、科学の分野でも「Science for All」という言葉があります。これはイギリスで始まった活動ですが、その結果として「Science communication」や「Science Literacy (科学リテラシー)」という言葉が出てくるのですが、「全ての人にサイエンスを」という、要するに「専門家だけではなく、一般の人にサイエンスを」という意味なんですね。「Science for Citizenship」という言葉もありますが、「Sport for All」というのが、何となく同じように感じまして。

真田：多分、ほとんど同じ考え方だと思います。全ての人が全ての世代にわたってスポーツを享受していくという、このような考えでありまして、オリンピック・ムーブメントの中の重要な1つとなっております。日本のオリンピック・ムーブメントを推進された嘉納治五郎先生も、当初からJOC、日本体育協会を作るときから、Sport for All、国民体育というように言っていました。そういう名称で万人の日本国民全体のスポーツ、体育というも

のを振興しようということで行っておいりましたので、これは重要なレガシーではないかなと考えております。そういう意味で非常に、共通性、親和性が高いのかなと感じました。あと、いかがでしょうか。

村田：質問ではございませんが、一言、補足的な意味でよろしいでしょうか。今、嘉納治五郎という名前が出ましたので、触発されて。今で言うところの実質的なJOC、当時は大日本体育協会。我々講道館柔道資料館としては、例えばお客様が1,000人來られたとします。それは資料館の見学ということにおいては、目からの情報を頭で考え、凄いなあと感動か何かを受けてお帰りになるということが、まず普通のパフォーマンスでありましょう。ただし、我々としてはその1,000人の方々がそれで終わってしまってるいとなりますと、講道館本来の趣旨に沿ったものかどうか議論がございます。

結論から先に申しますと、我々は極めて実技の世界なんです。武道、戻れば武技、武術といったら知識ではなくて体を動かすほうから始まる。嘉納治五郎という人も本の虫になるなというような小論文があるくらいで、資料館としてもその精神を受け、皆さんどうか感動を受けた後には1人でも2人でも柔道着に手を通していただいて、汗をかいて、そして受け身をとって頭をゴツンと畳に打って、こういう世界なんだと。これを技術的に、これから技能向上を磨いていって、そしてまた資料館に戻ってきて、先人、先達の思いや思想、教育、理念等々に立ち戻り、そしてまた修行の畳に帰っていく。こういうサイクルこそ、最終、究極の目的にしている訳です。ですから言葉は不適切だと思いますが、頭でっかちになるなよというところだけは、非常に近年、欧米の方々と意見が一致しておるところでございます。以上、補足でした。

真田：ありがとうございました。どうぞ、來田先生。

来田：私は小野沢さんと小川先生に少しお伺いしたいのですが、サッカーの場合も、かなり海外に広くミュージアムを持っているところがあると思うのです。それから、さっき小川先生がお話しになったような、既に幾つかのタイプの違う博物館と連携をしているということ。どちらも少し立場は違いますが、海外の博物館や資料館との連携ネットワークというのをどのように考えておられるのか。それはある程度存在するのか。言語の問題がおそらくありますけれど、そうした問題を越えて何かやっつけようというような試みはあるのかどうか。少しお伺いできればと思うのですが。

小野沢：サッカーですが、正直なところ、今、海外の博物館・資料館との連携はやってません。今後いろいろ調べていきたいですが、National Football Museum というのがイングランド、マンチェスターにあります。あと国がやっている博物館、サッカーに関する博物館ですが、この10月にドルトムントにドイツのサッカー博物館ができるというようなことも聞いております。ちゃんとは調べていませんが、資料的な見せ方をしているところとは非常に少ないです。うちもそうですが、いわゆるトロフィー、それから記念物、ユニフォームやシューズ、人にフォーカスしたもの、そういう見せ方をしているところが非常に多くて、資料的価値を前面に出しているところは余りないです。その辺は、これから調べていきたいと思っています。

小川：ICOMが2019年に京都で開かれますが、その下に幾つかの委員会があり、例えばNATHISTという、Natural History（自然史）博物館に関する委員会がございます。今度、これは台北で10月下旬に開かれますが、それぞれのワーキンググループみたいな委員会があるのがICOMの下にあります。科学系の博物館、自然史系博物館、もう少し細か

いものではコインのコレクションや楽器、確かスポーツもあったかもしれませんが、そのような委員会があって、そこでのネットワークは十分動いています。それ以外に科学系ですと、それぞれの大きい国の科学系博物館のネットワークが別にあります。例えば、科学館のネットワークですと、アメリカにはASTC（Association of Science - Technology Centers）という大きいネットワークがあります。それから、アジアにはASPACというネットワークがあり、アジア太平洋地域の科学館のネットワークです。そういうネットワークにうちの博物館も当然入っていますが、職員を派遣したり、情報交換したり、場合によっては、これは非常に商業的かもしれませんが、ASTCぐらいになると、例えばニューヨークの自然史博物館やシカゴのField Museum of Natural Historyなどで開発した新しい巡回展示を売り込みに来る場所、という感じの協議会になっており、幾つかの博物館がつくった巡回展をほかの博物館が見て、うちで借りますよとか、そういう横の交流などもあります。

昔、うちでやった「チョコレート展」などもシカゴのField Museum of Natural Historyとニューヨークの自然史博物館が共同で開発したもので、なかなか面白い展示でしたが、そういうものも世界巡回する時にそういうところを見せて、興味ある博物館が契約して回していく、そういうこともやっています。「ダーウィン展」なんかもそうですね。『種の起源』出版100年を記念して、ナチュラルヒストリーの名家であるイギリスのNatural History Museumと、アメリカの自然史博物館と、幾つかの博物館で多分つくったと思うのですが、そこを巡回していくとか、科学系の博物館は資料がかなり横串に使えるので、そういう点ではネットワークが元々あるような感じがいたします。

真田：ありがとうございました。それではフロアの皆様からご質問がありましたら、お願いしたいと思います。挙手をしていただければと思います。

質問者1: 日大にいた木下（日本大学名誉教授）です。今日お話を伺って色々勉強させられたのですが、日本のスポーツ関係の博物館、特に秩父宮記念スポーツ博物館のことは多少知っていますが、実際に行われていたスポーツ、そういったものから知っている範囲の知識で考えると、集まっている資料というのはかなり偏っている。場合によっては、かなり重要なものが無いのではないかと。そういう意味では集めるほう、あるいはそういうものを組み合わせて作り出していくような資料もあると思いますが、そういった方面の努力というのは、基礎的な問題として当然続けなくてはならない。今日お話を伺っていて勉強させられたのは、それをどのように利用し、何を目的にどのように利用するかと、そういう点についてもいろいろ考えさせられたということで、今日はよかったと思います。

それから、先ほど来田さんが体操着のことを言われましたが、記事を書かれた人はどういう根拠であの記事を書かれたのか。何か事実誤認があった読み損なっているんじゃないかという気がしたので、これについて、私が正しいかどうか分かりませんが申し上げますと、ロスのオリンピックの時、衣擦れの音がしたというのは当時の人が書いた選手の記事にもありますし、それから私、本間さんから直接聞いたのですが、この衣擦れの音というのは日本で習っていた鞍馬、これはドイツから京大に来た選手に習っているのですが、特殊種目の選手だったのですね。その人が鞍馬をやるときに馬から体が離れなくて擦れた。日本人はそれを見ていて、擦りながらやらなくてはいけないと思い練習していったところ、向こうではそうではなかったので面食らった、という話がある訳です。衣擦れの音というのは、擦れたほうの音というように私は受け取っています。ですから、今日の体操着そのものかどうだったのかというのは、もう一度検討していただきたいなと思います。

それから、その当時の体操着のことで考えると日本の場合は木綿です。ですから、ほとんど伸縮性がないので、体操の選手はかなりダブダブのを着てやっています。ロスに行った人たちはその時にダブダブのではなく、日本としては新しいものを着ていったのかもしれませんが、その布が何だったのか私は全然知りません。その当時の外国人はどんな体操着を着ていたのか、それに対して日本人の体操着はどのようなものだったのか。これについて何か資料がある、あるいは博物館で調べられて、もし比較ができるのであれば、かなり答えは正確なものが出てくると思います。そのことだけ、少し付け加えさせていただきます。

真田: どうもありがとうございました。こうやっていろんな方々のネットワークを広げていくと、また新しい発見につながるということを実感させられました。木下先生、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

質問者2: 読売新聞の結城です。非常に面白いお話の数々でした。

先ほど村田さんもおっしゃったように、博物館、そして知を与えるという役回りの1つは、いらっしゃる方たちにある意味でスポーツへの啓発、それからインスピレーションを与えて、もっと自分でやってみたいと「Sport for All」の流れに巻き込んでいくためのものである。そこは非常に面白い、感銘を受けたのですが、今現在、日本のスポーツを特に扱う博物館の中で、「Sport for All」を目途にして、例えば、スポーツはこういった価値があるとか、やっていくことで高齢者も含めてどういう年代でもこのような有益なことがあるよ、体を動かすという意味はこうだよということまでも多少踏み込んで、流れとして歴史があり、知があり、発見があり、憧れの選手の何か文物があり、そして、みんなもやってみようよ、という流れを作っていけるような博物館が

日本に存在するのかどうか。もしくは、どうやったらそんなものができるのか。

国際オリンピック委員会のローザンヌのオリンピック博物館は、常設ではないですけれども仮設の展示などでそういったことを時々やっておりますし、広大な庭などを含めて、体を動かすということについての意味で触発を狙っているのかなあとと思う部分があるのですが、そのあたりを伺いたい。

あと、先般の白紙撤回で新国立競技場の新しい計画の中ではスポーツ博物館が無くなってしまいましたが、これに関してもしご意見をお持ちの方がいらっしゃれば、どなたかお願いいたします。

ここは質問ではございませんが、今日の日大の先生のお話も非常に面白く伺いました。私、池田敬子さんの人生の連載をする時に、彼女からお借りした日本体操の歴史の古い本がございます。共同通信の元記者の方が当時のいろんな体操協会の方の話を伺いながら、その中にこのロス五輪のくだりがございましたので、資料としてご紹介申し上げます。

真田：ありがとうございます。それでは来田先生、お願いできますか。日本全国に、それに匹敵するものはあるかどうか。

来田：いわゆるスポーツ博物館という形ではなくて、例えば愛知県にあいち健康プラザというのがあるのですが、これは多分、厚生労働省の管轄で、文部科学省のものではないと思うのですが、そこは自分の体をいろんな形で動かしてみたり、あるいは体力測定をしてみたり、そして、その館の外側はかなり広い公園になっていたりとかして、いろいろな、いわゆる近代スポーツだけではないものが経験できる。あるいは自分の体の中のデータを測定できるなど、そうしたものがあります。こういう既存のあり方とスポーツ博物館とが合体し

ていけば、今、結城さんがおっしゃったようなものに少しなっていくかな。そういう意味では、今まで縦割り行政的につくってきた資産をもう少し間口を広げていくということをやらなければならないかと思いました。私の知識ではそのぐらいです。

真田：ほかの方、いかがでしょうか。「Sport for All」も含めたミュージアムですね、私が発表したのは。そういうものが日本にはないので、ぜひこの機会に「Sport for All」を意識したミュージアムを造っていただければ、そこにはいろんな歴史的なものも含めて、そして、今、ローザンヌにあるような、様々な身体的な感覚をそれこそ味わえるようなものができたら素晴らしいなと思っております。

今は新国立競技場の中にスポーツミュージアムを基本的に造らないというような方向性になっておりますが、こういう点で価値がある、こういう点でオリジナリティーが高い、ほかの科学博物館、美術館、図書館などと連携したらこんな素晴らしいものができるということを示していけば、やがて、やはり必要だと、そういうような盛り上がりになっていくのではないかと。そういう思いも込めて、本日のシンポジウムというように理解をしているところであります。ということで、結城さん、よろしいでしょうか。

それでは、時間になりましたので、以上でこのシンポジウムを終了させていただきたいと思います。どうも、4人の先生方、大変ありがとうございました。どうぞ拍手をお願いいたします。

三輪です。私は今年の3月まで九州国立博物館に勤務しております、博物館運営や博物館経営に携わっていたのですが、約10年間、博物館のあり方というのを私たちに経験してきました。

面白くなければ博物館ではない

博物館のことについて申しますと、ここ2、3年前までは、博物館というのはどちらかというと、来たい人だけ来たらい、見たい人だけ見たい、多分そういう流れだったと思います。

主に人文的な博物館、あるいは自然的な博物館も、本当に熱心な人は来るけれども、どっちでもいいという人はほとんど来ない。だから言ってみれば、年間1万人とか2万人、県立クラスのかなり大きな博物館でもその程度の人しか来なかった。そうではなくて、これからの博物館というのは、来たくない人にも来てもらおうと、そういう意気込みが必要なのではないか。

私は「面白くなければ博物館ではない」という言い方をしておりますが、これから話題になる、あるいは我々がこれから本当に真摯に考えなければならぬこのスポーツ博物館、これもまさに「面白くなければスポーツ博物館ではない」と、そういう視点がまず必要なのではないか。

その間に立つ、記録の問題やアスリートの強さなど様々な問題はあります。しかし、まず、あらゆる博物館の捉え方の中で「面白くなければ博物館ではない」、そういう捉え方が多分大事だろう。

私が掲げている標語に「学校より面白いところにしよう」というのがあります。つまり学校より面白く、教科書より分かりやすい、そういうところから博物館というのは発想として入っているのではないかと、また入っていくことが大事なのではないか、ということです。

後世に何を残すか

今日は、あまり時間はございませんが、スポーツ博物館づくりへの期待を込めまして、スポーツ博物館設置の重要性や、博物館の連携、そうした問題について、思いのたけを少しだけ述べさせていただきますと、そんなふうに思っています。

実は、先年決まりました2020年の東京オリンピック・パラリンピック、これを基礎にして、多分、一番大事なのはスポーツそのものもそうですが、資料や記録、あるいは様々な意匠というかデザイン、そういうことを含めて後世に何を残していくか。何を捨てて何をしっかり残していくか。そういうことが多分、非常に大事だと思うんです。後世に何を残すかといった時に、それをしっかり受けとめていくのが博物館であり、またそういう博物館でなければいけないと、そんなふうに思っております。いずれにしても、後の世に何を残すべきかということを視点の中心にして、少しお話をしてみたいと思います。

オリンピックと文化

オリンピックは私が今更ここで申し上げるまでもなく、皆さん当然ご存じだと思いますが、オリンピック憲章をぜひ見ていただきたい。その憲章の中に文化のことが謳われていますよね。スポーツだけでなく、文化のことが。つまり、スポーツを文化と教育に融合させる、そういう言い方をしております。教育と文化、それに融合させるような、そういうスポーツのあり方。つまり、これからの生き方を創造するような、そういう基本的な精神がオリンピック憲章の中には謳われているのではないかと。

今まで私たちはオリンピック、オリンピックとずっと言ってきました。しかし、その中で文化については意外に触れられてこなかった。でも、これからはしっかりと2020年を目指して、文化の面でも当然見ていく必要があるということです。

具体例として少し申しますと、開催国のオリンピック委員会は文化と芸術の推進を活動に含めること、これを推奨すると、そういうことを言っているはずなんですオリンピック憲章では。それによって何が行われるかというのは、かつての東京オリンピックも若干そういう様相があった訳です。つまり、昭和39年のオリンピックもそういう取り組み方がある程度したと思っています。オリンピックの開催期間に展覧会、あるいは芸術活動そういうものを含めてですが、複数の文化イベントを計画しなければならないと、こういう主張をしている訳ですね。当然そこでは博物館や美術館、あるいは科学的な博物館も含めてですが、オリンピックに文化の面で参加していくという、かつてはそういうあり方を多分どこも大事にしていた。

つまり、繰り返し申しますと、文化と五輪は本来は一体のものである。オリンピックはスポーツだけじゃない。スポーツも文化だと言えそうですが、やはり「オリンピックと文化というのは一体のものである」ということを、オリンピック憲章が制定された当初からしっかりと提唱している、そのように思っております。だから開催に向けて、私たち、あるいは関係者は、文化への関心を当然のこと高めていく必要がある、そんなふうにも思っております。いずれにしても、東京オリンピック・パラリンピックを私たちは文化の面でも実りあるものにしていかなければならない、そういう決意を本当に持ちたいと思っています。

例えば2012年、ロンドンでの2回目の大会では、ご承知の方は大変多いと思いますが、文化を本当に前面に出しましたよね。まさにあれは文化オリンピックだ、と言っている人もいた訳ですが、文化を本当に前面に押し出していた。ロンドン大会の文化教育委員会の最高責任者を務められたジュード・ケリーさんは数年前に日本で講演され、私も講演を聞く機会がありました。ケリーさんはオリンピックの準備の段階で9,000人の文化関係

の人に会われた。そして、もちろん競技でいわゆるスポーツの展開というのを大事にされる訳ですが、そういう中にぜひ文化の面もということで、本当に大きな、ロンドンというのが文化のオリンピックとして大成を果たされる。大変精力的な活動をされた委員長でありますけれども、それを見習えとは言いませんが、一方ではそうした精神を日本もこれからしっかりとっていく必要があるんじゃないか。私は、この場を借りて、あえてそういうことを主張したいと思っています。

日本の博物館の中でのスポーツ博物館

日本でも文化の面では、もちろん既存の博物館や美術館がそういうところに協力していく、対応するというのは当然あるのですが、やはり基本的にはスポーツ博物館、そうしたスポーツ博物館のあり方、あるいは対応の仕方というのをこれから考えていく必要があるのではないかと。

日本の博物館や資料館というのは、もう既に今日の討論の中で幾つか話があったかもしれませんが、私たちの認識として全国に大体5,000館ぐらいあります。多分、世界で面積当たり一番多いのが日本なんです。ただし、5,000館ぐらいの中の自然系、科学や動物園、水族館など、実は日本では水族館や動物園も分類上は博物館の中に入っておりますが、大体、そうしたのが2,500から3,000くらい。残りの2,500、あるいは2,000ぐらいが通常いうところの人文系の博物館。つまり、歴史を扱うとか、芸術を扱うとか、そういう美術館・博物館になる訳ですが、そういうジャンルを問わず、これからオリンピックでその5,000館ぐらいがどういうふうに協力するかということは当然考えられる訳です。日本の博物館はそんなに沢山あるんです。博物館、あるいは博物館相当施設が。

しかし、幾つかの問題があります。その中でスポーツを扱って、しっかり展開している博物館は果たしてどのくらいあるのか。全くゼロとは言いません。普通の県立博物館や地方公共団体の博物館でも、スポーツを1つのテーマとしてやったというところは、なきにしもあらずです。

先年、東京オリンピック・パラリンピックが2020年に決まったというニュースを受けて、直後に九州国立博物館では、急遽、一般向けの展示をエントランスホールで行いました。秩父宮記念スポーツ博物館から表彰台やポスター、若干のメダルなどを借りてきて、本当に素朴に並べた。本来の博物館の展示物ではなく、エントランスホールに20点ぐらいの資料がある。表彰台はルールに準じた高さかどうか知りません。しかしびっくりしたのは、ものすごく大勢の人がその上に入れ替わり立ち替わり登って、子供たちが、大人が写真を撮り合ったり、Vサインを出して様々なポーズをとったり、本当に喜んでいる。これは2020年の開催を喜んでいるということと同時に、スポーツに関する催し物として非常に新鮮な思いで多くのユーザーが本当に楽しんでくれた。何よりも嬉しかったのは、子供たちが本当に喜んでくれた。そういう経験を持っております。

しかし、一般的に博物館がスポーツを正面から扱うということは、非常に少なかった。もちろんスポーツの範囲というのにはあります。古式のものとか、古典的なものとか、これは幾つか部分的に扱ってきた経緯があります。武器・武具の展覧会をやれば、武道の中にいわゆるスポーツ的な要素のものもありますので、そのようなものが展示の対象になるということはありません。2020年に向けて博物館人の1人として、これからそういうところにどのような応援とメッセージを私たちは送っていくのか、それは非常に大事なことだと思います。

そういう点では、日本のスポーツ博物館というのは無い訳ではございません。しかし、ご存じのように非常に縦割りのというのか、専門的と申しますか、

あるいはクラブごととか、幾つかの独特のタイプであります。

例えば相撲博物館、あるいはサッカーの博物館。私は九州でちょうど10年ぐらい生活をしたのですが、あそこにはヤフオクドームに王貞治ベースボールミュージアムというのがあります。会長の王さんを顕彰するような。しかし、そこは非常に面白い工夫がある。王さんの業績をただ見せるだけではなく、人としての王さんとスポーツの面白さを同時に見ることができる、そういった様々な取り組み方をしている。

もっと専門的に言えば、秩父宮記念スポーツ博物館、これが存在する訳ですね。ご存じのように前の国立競技場の中にありました。今、資料は下町の向こうに疎開しているようですが、6万点ぐらいの資料があるそうです。これまでこのスポーツ博物館の存在を知っている人は多分無かった。無かったと言いきれませんが、本当に一部の人しか知らなかった。特に学校教育の中ではほとんど知られていなかったんじゃないかと私は思っております。国立競技場を解体する時に全部移動した訳ですが、その前に資料のチェックを関係者が行ったら約6万点もあった。6万点のものがそこで眠っていた訳です。しかし、それを眠らせておくことは本当にもったいない。そういうものをどう利用し、活用するか。あるいは、更にこれから資料の収集をどうしていくか、ということは本当に大きい話なんです。

スポーツを文化として捉える場

私は期待されるスポーツ博物館の設置という問題について大変関心を持っています。例えば地方の博物館、多くの都道府県からいわゆるアスリートが出ています。みんなそれぞれ故郷があって、その故郷では「オリンピックに出た」「こういう競技会に出た」「こういうところで賞を取った」、これは地域の誇りなんです。先般、大村智さんがノーベル賞を受賞された時に、たまたま仕事で山梨大学の医学部に行って

いたんです。大村さんは山梨大学の医学部ではなく教育学部の出身だそうです、学校中が興奮状態だった。びっくりしました。そういうものなんですね。この地域でアスリートが出たら、あるいは一流の選手がそこにいたら、本当に絵になる。博物館を構築するとかというのは、すぐ誰もが考えること。そういうような必要性を見ながら、どう連携を取っていくかというのは、本当に大事だと思っています。

だから、私がここでぜひ皆さんに訴えたいのは、スポーツを文化として捉える場、その必要性をここでは主張させていただきたい。当然、走ったり、跳んだり、投げたりというのはスポーツの基本です。でも文化として捉えることが今まであまりなかった、日本のスポーツ界では。そう言い切っては怒られるかもしれませんが。例えばアスリートの記録を体系的に見ようとした時、各競技団体に問い合わせればある程度分かる。でも、そういうのを縦系列だけでなく、横断的にもっともどどこかでまとめて、ネットでも何でもいから知ろうとした時、なかなか大変なんですね。そういうことを中核的な、あるいは総合的な施設として持ち込んでいくというのは、将来に向けて本当に大事な計画ではないかと、そんなふうに思います。これは別にアスリートの記録のみならず、様々な競技の記録や、特にそれらの保存、活用といったそういうあり方です。

私が秩父宮記念スポーツ博物館を訪れた時にびっくりしたのは、オリンピックで優勝、あるいは金メダル、銀メダル、日本が貰ったメダルは全て揃っているのだらうと思ったら、揃ってないんですね。もちろん、その栄誉は個人に帰す訳ですから、それはそれでいいのです。ただ、コピーでも何でもいい、そういうものを系統的に収集していくような場というのが、今までほとんど準備されてない。些細なことですけども、これは日本のこれからを考える時に、本当に大事なことです。

今、コピー技術は素晴らしいものがあります。本物を超えるコピーというのはもちろんありませんが、それに近いような、素晴らしいものがあります。そうしたものがずっと顕彰され、利活用できるような、そんな博物館のあり方というものがこれから本当に必要ではないかと、私は思います。

つまり、スポーツを文化として楽しむ場、あるいは実際に体感するような場、そうした場がこれからの大きな課題の1つではないかと、そういう必要性を感じております。今ここでの私の思いを有り体に言えば、スポーツ博物館の無い先進国というのは、スポーツ文化に関しては大変後進国であると、そう言いたい。スポーツ博物館というものを真摯に総合的に考えていく必要があるのではないかと、そう思います。

冒頭申しましたように、ともかく博物館というの難しいという印象があるのですが、やはり分かりやすく、面白い、楽しい、そこに入るとわくわくどきどきするような、そういう空間、対応の仕方。これはユーザーだけの問題ではなく、受けとめるスタッフの力量の問題もあることは当然ですが、これからのあり方では「面白くなければ博物館でない」という、そういう取り組み方はスポーツ博物館にも多分通ずる話だろうと、そんなふうに思っております。

文化観光への参画

もう1つは、近年の1つの非常に大きなあり方で、ご存じの方は多いと思いますが、文化観光と云っているあり方があります。つまり、文化を観光の中に利活用していく。この文化観光への参画はスポーツ博物館というのは非常にやりやすいのではないかと。近年、ご存じのようにスポーツツーリズムというものどう連携するか。スポーツツーリズムというのは、言ってみれば文化観光そのもののようなものですね。あれの推進基本方針というのが確か平成23年に策定されていますが、これのベースになっているのは観光資源としての博物館、そういう捉え方だっ

たと思います。博物館というと、ものすごく学術的とか、そういう難しい面をついつい考えてしまいますが、決してそんなことを考えることはない。今、文化をいかに観光の中に生かすか、文化をいかに多くの人に楽しんでもらうかということは、本当に大きな基本の姿勢ですので、文化観光への参画もスポーツ博物館という立場で言えば、ものすごくしやすい。多分、そういう設計が立てやすいと思っております。

先ほど私は九州国立博物館でやった、ちょっとした展覧会の例を挙げましたが、とにかく表彰台やポスター、メダルの展示だけでも「あの時のこういうあれか」という、そういう感動でもって見られる。見る人たちは本当に大きく想像力を膨らませながら、そこで来館者同士が議論したり、楽しんだりしていくという、そんな状況を私は目撃しております。

地域との連携

何よりもスポーツというのは地域性が非常に高い訳です。もちろん、東京あるいは大阪というような中心部で大きなスポーツイベントやスポーツ大会が行われる。でも考えてみると、アスリートというのは地域の小学校や中学校、高校から特別の記録を持ちながら注目され、地域から育ってくる訳です。地域はみんな、彼らを応援している。野球の選手でもそうですね。みんな地域の人たちが応援している。つまり、選手の出身地、あるいは来し方、地域の伝統、有り体に言うと選手そのものも地域のアイデンティティーかもしれません。そうした中に郷土愛とか、郷土の誇りとかということを負いながら、アスリートたちは成長していく。あるいは自ら鍛練していく。

そういう点で言うと、先ほども少し触れましたが、例えば各地の地域にある博物館と連携しやすい条件が、そういうところにあるのではないか。選手1人1人のバックグラウンドには全部、出身

の地域があります。出身の地域はみんな博物館、資料館を持っています。そういうような連携の仕方でもっとスポーツ文化というのを広く大きく捉えていくような努力、実は日本はこれまでそういう努力・展開をほとんどやってこなかった。私は2020年を機にそういうような展開をぜひ期待したいと、そんなふうに思っています。

スポーツ文化

国際舞台に関連している部分について多少申し上げますと、実は日本の博物館は国際的な舞台にも大きく参画しております。それはICOM、国際博物館会議と訳しておりますが、このICOMが2020年のオリンピック・パラリンピックを応援するために言ったほうがいいと思うのですが、連携できるように2019年に京都でその国際大会を開催します。世界の博物館大会です。できることならそこでスポーツ文化の国際委員会設置をぜひ提案してみたいな、と私個人的にはそう思っています。

実は国際委員会というのは30ぐらいあり、エジプトだとか教育普及だとか色々なのがあります。150カ国ぐらいが参加しているのですが、スポーツ文化というのはICOMの中に全くありません。日本はそういう中でスポーツ博物館、あるいはスポーツ文化という提案をしていく、いいチャンスだと思っています。そういう流れの中で、私たちはスポーツ博物館というのがこれから展開することに大変期待をしたい。そんなふうに思っています。

地域住民の参画

実は非常に大事なことが1つありまして、時間があまりございませんので簡単に申しますと、ではその運営や経営はどうしていくか、という問題が当然出てきます。膨大な金が掛かるじゃないとか何とか。そうではなくてボランティアの人たちの力、あるいは市民の力をどう使っていくか。スポーツでも大勢のボランティアの方を利活用しながら、1つの

大会を成功させる。大会の成功の起爆剤になったのはボランティアだ、というような例は各地でいっぱいあります。この博物館でも市民がいかに参画するかということは、本当に大事なことだと思います。市民参加なしのスポーツ博物館はあり得ない、そんなふうにご断言すると怒られてしまいますが、そういうことです。

市民の力は非常に素晴らしいものがあり、私自身、文化財の調査や研究ということをやっておりますが、1960年代の日本を考えるとよくお分かりのように、1960年代から70年代というのは何だったかという、まさに肉体的に非常に苦痛な思いを与えられた、そういう生活環境の中に多くの人がいた訳です。

分かりやすく言うと公害です。例えば四日市や川崎、あるいは瀬戸内海、熊本ではイタイイタイ病などもあった。そういうものに向かって立ち上がったのは行政ではなく、最初に立ち上がったのは市民なんです。大気汚染防止法や水質汚濁防止法、あるいは自然環境保全法というような我々の生活環境の中にある大事な制度、これのもとを作ったのは市民なんです。

そういうことを思い返してみると、前の東京オリンピック直後にそういう問題が起こってくるのですが、2020年はそういうことをやってきた市民の力、そうした市民の力をこれから大いに利活用しながら、このスポーツ博物館へ向けて大きく取り込んでいく必要があるのではないかと思います。

全ての人に優しい博物館

実は市民の力で成功させる、成立させる、展開させる、そういう博物館でもう1つ大事なことは、障害がある人たちに対して優しい博物館でなければいけない。これは絶対条件です。

私がいた博物館では白い杖をついた人たちが大勢いました。普通、博物館へは物を見に来る、

あるいは若干の体験をしようとしてやって来ますが、そこに目がご不自由だと思われる人たちや、盲導犬や介助犬を伴ってやって来る人たちがある。今、そういう変化が各所で見られ始めています。それらに対して十分対応できるような、本当に全ての人に対して優しい、そういう博物館のあり方。私はそのモデルをまさにスポーツ博物館などに求めながら、その有り様をむしろ世界に発信していくことが必要なのではないか、そんなふうにお思っております。

いずれにしても2020年に向けて、市民の力を基に力強い日本、あるいは優しい日本のためにも、新鮮なそういう文化創造の場をぜひ皆さんと共に対応できれば、オリンピックを上手く活用してと言うと大変失礼な言い方になるかもしれませんが、まさにこの機にそうした新しい意気込みを持って臨むのが、私たちのこれからの文化に対する1つの思いではないか、と思っております。

もう時間になりましたので、少し中途半端ではありますが、皆さんの頑張りを期待しながら、新しいスポーツ博物館のあり方をぜひ皆さんと共に考えていきたいと、そう思っております。ありがとうございました。

独立行政法人日本スポーツ振興センター理事の高谷です。秩父宮記念スポーツ博物館・図書館の担当理事として一言ご挨拶を申し上げます。

本日はお忙しい中、多くの方にシンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

また、本シンポジウムにおいてご講演、ご登壇いただきました先生方にも厚く御礼申し上げます。

冒頭で説明がありましたが、スポーツミュージアム連携・啓発事業は「巡回展」、「国内外のスポーツミュージアム情報収集」、「人材育成」という3つの柱に取り組んでおります。そのどれもが私どもだけで成し得る事業ではなく、全国の博物館や美術館、大学、団体など多くの方々のご協力をいただき、進めていくべきものと考えております。

本日も講演いただいた先生方のお話しの中に「これからのスポーツ博物館」というのは、単にモノを展示する場ではなく、人の視点からスポーツを見て、人に合ったスポーツを創造していく場である、またスポーツ文化を発信していく場である、というご提案がありました。

皆様のご期待に沿えるよう、今後も様々な取り組みを行って参りたいと思っております。なにとぞご支援を賜りますようお願い申し上げます、私の挨拶といたします。

本日は長時間にわたり、ありがとうございました。



■真田 久

1955年12月東京都生まれ。
筑波大学体育専門学群卒。
同大学院
体育研究科修了(博士(人間科学))。
筑波大学体育系教授。
2012年より体育専門学群長。
IOC公認「筑波大学オリンピック教育
プラットフォーム」事務局長。
主な著書：
「19世紀のオリンピック競技祭」。
「現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか」。「日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史」。



■村田 直樹

1949年7月埼玉県所沢市生まれ。
東京教育大学体育学部武道学科卒。
同大学院体育学科研究科修士課程修了。
公益財団法人講道館図書資料部長。
日本武道学会理事長。
講道館八段。
主な著書：
「スポーツと身体運動の科学的探求」。
「現代柔道論」。「和英対照 柔道
—その心と基本」。「柔道大事典」。
「武道を知る」。「和英対照 柔道
用語小辞典」。



■来田 享子

神戸大学教育学部卒。
同大学院教育学研究科
修士課程修了(教育学修士)。
中京大学大学院体育学研究科博士
課程修了(博士(体育学))。
中京大学スポーツ科学部教授。
日本体育学会常務理事。
主な著書：
「レースは過酷だったのか—アム
ステルダム五輪女子800m走の
メディア報道がつくった「歴史」」。
「指標あるいは境界としての性別
—なぜスポーツは性を分けて競
技するのか」。



■小川 義和

1982年筑波大学生物学類卒。
東京学芸大学大学院連合博士課程
学校教育学研究科修了(教育学博士)。
国立科学博物館事業推進部参与。
筑波大学客員教授。
主な著書：
「持続可能な社会を創る環境教育論
—次世代リーダー育成に向けて—」。
「現代の事例に学ぶサイエンスコ
ミュニケーション」。「展示論」。
「サイエンスコミュニケーション
科学を伝える5つの技法」。



■小野沢 洋

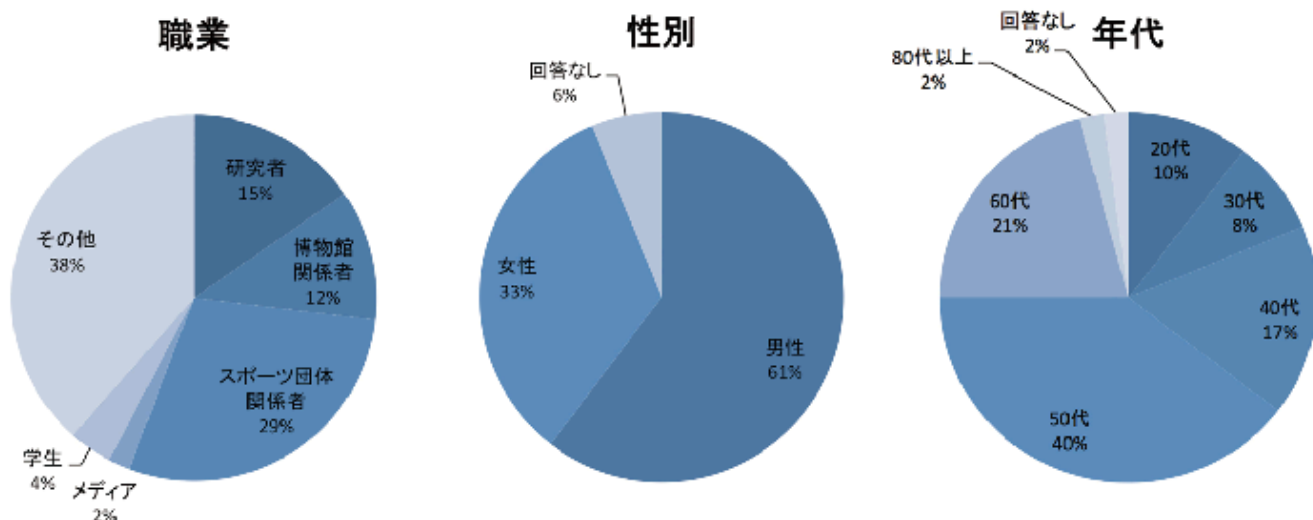
1959年東京都八王子生まれ。
1983年東海大学文学部卒。
公益財団法人日本サッカー協会
日本サッカーミュージアム
コミュニケーション部参事。



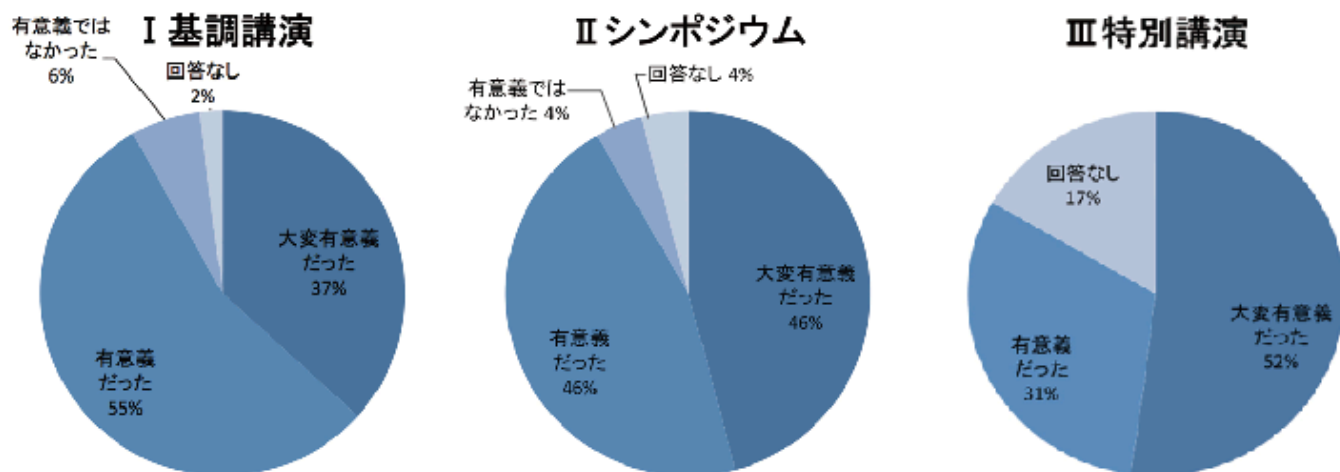
■三輪 嘉六

1938年岐阜県生まれ。
奈良国立文化財研究所研究員、
文化庁主任文化財調査官、
東京国立文化財研究所修復技術部長、
文化庁美術工芸課長、同文化財調査官、
日本大学教授を歴任。
九州国立博物館前館長。
NPO法人文化財保存支援機構理事長。
主な著書：
「日本馬具大観Ⅰ～Ⅳ巻」。

■職業、性別、年代



Q1. スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会では、スポーツ文化の発信の拠点となるスポーツ博物館の存在意義や、わが国におけるスポーツ博物館の設置意義の理解を促進するため、本日のシンポジウムを開催しました。本日のシンポジウムは有意義でしたか？



Q2.その他、本日のシンポジウムやスポーツ博物館に期待する機能等について、ご意見等がございましたらご自由にお書きください。

- 博物館ネットワーク構築の中で、スポーツテーマをいかに入れていくかができると良い。レガシーとしてスポーツミュージアムを2020年オリンピックの施設跡地などに活用できるよう、身体的な要素、多角的な内容があると良い。
- シンポジウム、来田先生の「利用者側からの視点」がとても参考になった。講道館資料室の「訪問者が実技体験をしてほしい」という思いは、スポーツミュージアムならではの特徴の出し方だと思う。
- 現在・過去の話が多く、今回の目的である「これから」の部分に対する話が少なく残念に思います。広く一般の方々に資源を利用して頂くために専門的な部分での意見だけでなく、もっと多分野の方々とのネットワークが必要かと思いました。
- 学芸員の立場がこれから重要になっていくことを感じました。これから新しい博物館を造り上げることにワクワク感を感じます。ボランティアをいかに巻き込むか、面白そうです。
- スポーツ博物館を2020までに立ち上げていただくようお願いします。
- 国境を越えて世界の人々が一体となれるスポーツは、教育や文化の視点だけでなく、世界平和、人類の一体感といった視点でも見る事ができます。スポーツミュージアムの設立を熱望しております。
- 有意義なシンポジウムであった。論点を絞った形で、またシンポジウムを行うことは有益だと感じた。
- 新国立競技場にはやはり是非前のようにスポーツ博物館があるべきだと思います。よろしく願いいたします。
- 競技ごとの Museum があるのはよいが、やはり「日本のスポーツ文化」としてとらえたスポーツの総合博物館が設立され、それを中心とした連絡会によって、各館のレベルの向上を目指して頂きたい。三輪先生の「楽しくなくては博物館ではない」大賛成です。
- 広く色々なスポーツの存在を知り、体験でき、自分に合ったスポーツに出会える機能に期待します。
- 来館した幼児や小学生達が、様々なスポーツを体験でき、自分に合ったスポーツを見つけることができるような施設を作っていただきたい。また、親子で楽しめる(科学博物館のような)スポーツ博物館にしていきたい。例えば、昔の用具を再現し、現代の用具との比較など。
- 「おもしろくなければ博物館ではない！」(三輪先生)⇒史料・文化+科学(JISS=参画 じゃない)⇒わかりやすく+ユニバーサル+体験<一般向け>ナショナルの見学コース+スポーツ(科学)博物館
- 日本人選手の活躍が目覚ましい昨今です。後世のため、是非みんなが楽しく学べる博物館が出来ることを期待します。
- スポーツ博物館の重要性を認識しました。2020年は是非実現できることを期待します。

スポーツミュージアム連携・啓発事業 シンポジウム報告書
これからのスポーツミュージアムのあり方について

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

編集 スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会

発行 スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会

〒120-0005 東京都足立区綾瀬 6-11-17

独立行政法人日本スポーツ振興センター

秩父宮記念スポーツ博物館・図書館内

印刷 株式会社 文研